論文の分量削減のためのヒント

横浜市立大学学術研究会 編集委員会

『横浜市立大学学生論集』投稿論文の分量上限は「投稿要項」及び「執筆見本」に準拠して原稿を作成したとき、44 頁です（字数ではなく、できあがりの頁数で判断いたします）。

この上限は学術雑誌の標準に照らし合わせた場合、決して厳しいものではありませんが、論文執筆ビギナーの皆様にとっては遵守が難しいようで、例年、当会に相談が寄せられます。

そこで、参考までに以下に分量を削減するためのヒントをお記しいたします。

1）図表・写真に関しては、本当に必要なものを厳選する。
そして、判読に差し支えないと思われる範囲でサイズを縮小する（図表・写真自体のファイルも必ずご提出ください。それらがあれば印刷仕上がりを鮮明にすることができますので、サイズを大胆に縮小してもほとんどの場合は大丈夫です。）

2）傍系の議論は思い切って削る（枝葉の議論を割愛して幹の部分に集中することによって、中心の議論を明確に浮き立たせるという効果も得られます）。

3）ブロック引用（改行して行の左を 2 文字分ほど右に寄せる引用）に関して、要点だけを残し、必ずしも必要でない部分は「中略」を多用する（その方が、その引用のどこに注目して欲しいのかも伝わりやすくなります。）**可能であれば、要点をパラフレーズする。**

4）3）とやや重複するが、論文中に転載するのは、入手が困難な文献・資料（出版・一般に公表されていない文献・資料。貴重書・資料など）から引用した文章とし、その他は出典を示すだけにする。

5）一般によく知られている事項に関しては説明を簡潔にする。

6）論文末尾に参考文献一覧を載せず、脚注／文末註に入れ込む（そうすると、必然的に引用・典拠元の書誌情報のみ論文に載せることとなります。）
また、参考文献一覧を載せる場合には精選する（**『学生論集』に関しては原則として、参考文献に載せる文献は本文内で引用・典拠した文献のみとしますが**、例外的に参照した文献も載せる場合には精選してください。）

7）最後に…、これは結構姑息な手段だが、ワープロで文章を書いた場合、どうしても読点（、）が多くなる傾向があるので、そのような読点を削る。また言い回しのうえで回りくどい表現を削る（例：「であると言える」→「である」）ことで、ある程度字数の削減が可能です。特に、段落の最後の行の文字数が少ない状態のときに集中的にこの作業をやると効果的です。）